

Title	経済史研究に就いて (一)
Sub Title	
Author	野村, 兼太郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1921
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.15, No.7 (1921. 7) ,p.1031(119)- 1042(130)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19210701-0119">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19210701-0119</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

爲め兵役の強制を説いた位のものであつた。

協會は各方面の代表者を招いて一八八六年六月九日から三日間 South Place Chapel で資本と土地の國有に就て大協議會を開催した『併し此會のお蔭だと云へるのは吾々の存在を Radical Clubs に知らせたのと吾々が此んな會の事務を上手にやつてのけられるつて事がわかつただけであつた』その上模様入の美しい趣意書や真赤な招待状を送つた爲め fogs and armchair Socialists など、嘲笑された位で全く失敗に終つた (Shaw—op. cit., pp. 10—12)

Wilson 夫人の様な無政府主義の同情者が會員中どの位あるか疑問であつたので同年九月十七日 Anderson's Hotel の會で Bland と Besant 夫人が次の様な決議案を提出した『社會主義は土地と生産手段並に富を生産し又分配する支配權を凡ての人が勞働に従事する社會の掌中に移す

爲め、政黨を自ら組織するのが適當である』

William Morris は之に對し追加條項を提出した『併し、社會主義者の最初の任務は民衆に彼等の現状がどんなであるか及びその將來がどうなるだらうかを教へる事にあり、又社會主義の理論を彼等に知らせるにあるのだから、どんな政黨もこの様な事を教へる妨げとなり又その理論を漠然とさせる様な妥協並に讓歩をしなくては存立出来ないものであるから、議會の論争に参加しやうと圖るのは社會主義者にとつて誤つた手段である』此二提議の討論が餘り激しくなつてホテルの支配人から今後會場を貸せぬと抗議が出たほどであつたが結局 Besant 夫人と Bland の動議は拾九對四十七で可決し Morris の追加案は二十七對四拾で否決された。(Shaw—op. cit., pp. 12—13)

### 經濟史研究に就いて(一)

野村兼太郎

最近に至つて我國に於いても多くの經濟史に關する述作が公にされた。此のことは單に一般文化史の研究に有用である許りでなく、又經濟學そのものに多大の影響を與ふるものである。更に又經濟學——延いては文化科學一般の方法論に關しても多くの議論を提供する根源となる。

今此處に經濟史研究の意義を明確にするに當つて、直ちに余自身の意見を述ぶる代りに、先づアッシュレー教授 W. J. Ashley の經濟史研究に關する論文の譯述し、傍ら是を批評することに依つて余の考ふるところを述べてゆきたい

と思ふ。

「經濟諸學に對する其の態度を鮮明にせんと欲する英米の學者は現在に於いて特に有利な状態にある。今や經濟學者間に、彼等の社會に嘗つて發見されなかつた寛容と相互慈悲の精神が行はれて居る。吾人は前の時代——ジョン・スチュアート・ミルの論文の公刊されてから、クリップ、レスリーの論文に於ける是が最初の反對の興起に至るまでの時期<sup>(1)</sup>——此の時代の大胆なる獨斷と一致とに歸へることを云ふのではない。寧ろ尙ほ未だ著しい相違があるけれども、一研究法の學徒がそれを科學的研究の唯一なる方法と決して主張しないこと、却つて歸納法の信仰者が今や演繹法の價値を一層十分認めて居ること、時には最も抽象的のものが事實に基き、最も具體的なるものが折々抽象法を用ひること、更に一層重要なのは彼等自身の思想の傾向が如

何であらうと兎に角彼等と行動を共にしない他の者に勝手にさせる、或は何か探るに價するものに到著するだらうと云ふ恩惠ある希望で彼等を其の途上に奨励さへすることである。今やそれは通常學徒を「心情、性質、訓練、及び機會の種類」の爲めに、違つた方法で働くやうにする古い學派の經濟學者にとつてさへ殆ど平凡なこととなつた。<sup>(註一)</sup>遂に英國に於いても一つの學會が建設された。其の會員の内には熱心に經濟學に興味を有つ著作者及び教師を包含して居る。又驚くべき程公平に各方面からの寄稿を歓迎する雜誌が創刊された。亞米利加に於いては數年間優秀な仕事をして來たが、然し其の會員が多少一方に偏して居た學會が今や其の範圍を擴張して、其の學說に對して嘗ては反對すべきであつた者さへ加入させるやうになつた。我か獨逸の同僚諸氏の間にも其の生活の單調を破つたやうな

論争も今や英語國の經濟學者に對して薄弱な反響を與ふるに過ぎない。又佛蘭西學派を分裂させるやうな個人的敵視は全く缺如して居る。而して、吾人の多數にとつて、二つの違つた英國經濟學者間に於ける近時の敵意の交換は殆ど時代錯誤のやうに思はれて居る。故に余が恐くは古い論争の蒸返しのやうに見えることを思ひ切つてやるのには幾分かの戰慄を禁じ得ない。尙ほよしあるものは非常に「極端に」云ふべき何ものかを有して居たかも知れないけれども、あるものは今忍耐と典雅とを以つて聞かれることに依頼すると考へて勇氣付けられるのである。」

(“Surveys.” p. 1-2)

蓋し方法論の問題は容易な簡單な問題ではない。然るにある科學を研究する立場から見れば方法を誤れる時は其の全研究を無價値にするこ

(註一) 中の論文に對して反對し、英國に於ける最初の歴史的方法の主張者である。

(註四) Marshall, Principles, p. 92. (2nd. ed.) 「原註」

(註五) 云ふ迄もなく經濟學を文化科學であるとするならば、經濟學の方法論は即ち文化科學全般の方法論でなければならぬ。唯こゝにかく云ふは未だ十分に全般に亘つて論述する程用意が出来て居ないからして、暫く方法論そのもの、純粹の考察は他日に譲ると云ふに止まる。此の意味に於いて本論文は未定稿である。

二

いて多少の考察を施さんと欲するも亦一部分此の理由に基く。勿論こゝに科學全體の方法論、否文化科學だけの方法論さへも論究しやうと云ふのではない。<sup>(註二)</sup>必要でない限り經濟學の範圍に限られる。アシュレーも云ふやうに唯徒に古き議論の蒸返しと見做さるゝことを恐れる。是亦讀者の忍耐と典雅とに依頼する許りである。

(註一) Ashley: “On the Study of Economic History.”

は一八九三年一月四日ケンブリッヂ大學でなした經濟史の教授の就職講演である。同年ケンブリッヂの “Quarterly Journal of Economics.” に掲載され、一八九四年七月十一、十二の兩日の Beilage zur Allgemeinen Zeitung. (Munich) に獨譯された。「原註」後更に氏の論文集 “Surveys, historic and economic.” に収録された。

(註二) 以下括弧の内のはアシュレー教授の原文、又原著の註は特に「原註」と附記する。

(註三) T. E. Cliffe Leslie (1825?-1882) の論文はケンブリッヂ大學の雜誌である “Hermathena.” (1876) に掲載され、彼の著作 “Essays Moral and Political.” (1879) に収録する。彼は J. S. Mill (1806-1873) の著 “Essays on some Unsettled Questions of Political Economy.”

「約二十年以前獨逸に於ける『歴史學派』又は『歸納學派』と稱せらるゝ若い人々に依つて、英國の學者間ではクリップ、レスリー及び近くはイングラム博士に依つて受け容れられた希望が是迄に實現されなかつたことを否定するのは無効であるだらう。彼等は經濟諸學が完全に迅速に變化することを期待して居た。今日最も廣く使用されて居る教科書を一見しなへすれば斯の如き完全な變化が起らなかつたことが解る。此の

思惑違ひの一部の説明は次ぎのやうな事實の内にも發見されるだらう。即ち歴史學派の人々が尙ほ未だ教科書等で親しくなつた形式の下で經濟學を考へつゞける程甚しく古い學說に迷はされて居た。彼等は尙ほまのあたり生産、分配及び交換の慣習的教儀式目 (Rituals) を有つて居た。尙ほ又彼等は神聖なる言葉、價值、需要、供給、資本、賃料、及び其の他——オリバー、ウエンデル、ホルムズ等の句を用ひると、恰も神學の言葉のやうに多くの消成極作用 (depoliarisation) が必要である言葉を使用した。彼等はある適用範圍を所有して居る從來の『法則』と内容に於いては違つて居るけれども、性質に於いて同一な『法則』の形成を期待して居る。彼等は無意識的にしたのであるが、恰も古い學派が其の注意を拂つたやうに、個人間の同一關係に關して一般的命題の一群を建設するのを目的としたので、

彼等は演繹法を不必要として排斥することに依つて始めたのであるけれども、現代の競争狀態の分析に確實に役立つ演繹法の使用に戻らなければならなかつたのは自然であつた。斯くして正統學派の『方法的』議論は容易に勝利を得たやうに見えたのであつた。

「余は後に是は事件の適當な叙述でもなく、又此の期間にあつても歴史的运动はゆるやかに其の眞の研究範圍に向つて歩を進めつゝあつたことを示さんと試みるだらう。その現代の經濟的研究に關してさへ眞の重大な仕事をなしたのである。それは過ぎ去つて跡も残さぬ單なる踏み間違ひではなかつた。又それは經濟諸學の全體に結合された有用な要素を貢獻したと云ふのも全く完全にそれを説明するものではない。是以上のことをなしたのであつた。それは彼等自身の研究に對して經濟學者の全心的態度を變化したと云ふこと、及び歴史の狂信者が尙ほ是等の辛棒して得た自明の理を主張するによい役目をなすだらうと云ふことを序でに注意するのは見當違ひのことではあるまい。

た。二大原則——同一觀念の違つた形式に過ぎないのであるが——經濟的結論は與へられたる狀態に對して關係的であること、及びそれ等は唯假設的の效力を有するのみであること、是等の承認は遂に經濟學者の心的習慣の一部である。又經濟的思考が社會的現象の判斷に説明しなければならぬ唯一のものではないと云ふ、又經濟的力が人間を動かす唯一の力ではないと云ふ確信の眞理も同一である。すべて此のことはずつと以前に口で許り認められて居たものであることを云ふ必要は殆どないだらう。然し是等の確信が今日向ひつゝあるやうに、日常思想の眞に基をなす充實せる部分であつたか如何かは前時代の文獻を熟知せる者の判斷に残されるだらう。事實此の有益なる確信は職業的經濟學者間に認知されるのであるけれども、教育ある公衆と共に願ひ得た程完全には殆ど起らなかつ

「理論的經濟學者自身の學說に對して彼等自身の變じた心的態度は現代の研究の立場から見て、歴史的運動の最も重大なる結果であるが此のことが餘りに大である爲めに、同一方向に於ける他の効果を小さくしてしまつた。然し是等の他の効果も注意に價するものである。而して是等は吾人が現代述作中の二つの最も重要なもの、マーシャル教授の『原論』とワグナー教授の『教科書』とを開くならば十分に明白である。マーシャル教授は現代の狀態を了解するにはそれ等の原由を思考することに依つて援けられることを甚だ明かに實感して居るからして、彼は其の著作を『自由産業及び企業の發達』の二章と



『經濟諸學の發達』の他の一章を以つて始めて居る。更に亦彼の人口に關する議論は學說史及び英國に於ける人口そのもの、歴史を前提とする。彼の産業組織に關する議論の大部分は歴史的思考から成立する。分配論は其の歴史的描述に依つて始り、賃料の學説は土地小作人の古の形式に關して思考されて居る。ワグナー教授に及ぼした歴史的思想の影響は更に一層著しいものである。彼の『財政學』の近頃の版を調べる機會を有つた者は誰も注意するやうに、其の歴史的材料の蒐集が餘りに速かに増加したので使ひにくくなる虞がある程である。更に思想の歴史的方法に彼が如何に精通して居たかと云ふ明かな證據は彼の一般學説の取扱法の大部分に於いて提供される。例へば現今了解されて居るやうに『資本』は一の『歴史的範疇』であつて、永久の必然的な『範疇』ではないと云ふ論旨を承認する

るが如きである。彼は歴史的法則——經濟的發展過程の法則——を形成しやうとさへ試みた。而してそれは現代の問題に密接に相觸れて居る事實に就いてある。即ち彼の『公的及び國家的活動増大の法則』の如きである。今日ワグナーが『極端な歴史主義』に對して抽象及び演繹の闘士であると看做され、又彼自身看做さなければならぬと云ふのは——大體に於いて十分正しいことであるけれども——幾分かそこに不思議の因縁を有つて居る。それは極端派の存在から生ずる利益は極端に達しないすべての過程が『中庸』の力を得ることにあると云ふ、ジョン、スチュアト、ミのル觀察の一つを想起する。

云ふ必要は殆どないだらう。然し乍ら彼等は——是が余の示さんと欲したすべてであるが——古い因襲を續行せんと欲する著作者にさへ及ぼす時代精神の影響——大部分實現されない影響を描いて居る。

「演繹歸納兩者の功績比較に關する、更に廣大なる論點に就いては、保守的な經濟學者自身も最早彼等の前驅者の特徴であつた演繹法の爲めに一言にしてすべてを網羅するやうな言葉を使用しなくなつたことが注意されるだらう。ジョーデーン氏が其の散文に於ける如く、彼等は一の非常に重要な範圍、即ち生産の部分に於いて歸納的であることを知らずして終始歸納的であつたことを發見した。更に『敘述的及び分類的經濟學の領内には價值ある經濟的仕事の無限の範圍が存して居る』と云ふことは認められた權威者に依つて許容されて居る、而して従つて

吾人は最高の經濟的助力の下に現れた現代産業生活に關する一團の有用なる研究——大部分歴史的研究——を見る。『ハーヴァドの『每季刊行經濟學雜誌』Quarterly Journal of Economics』上にさへ——それは學說獨有の本場であるが——

「關稅や金融の歴史に關する論文が掲載されて居る。『斯くして提供される特殊事實の知識はそれ自身に於いて經濟學の終局と目的を構成するものではない』」と云ふことは吾人が注意される眞理である。然し吾人は若しも更に考究の仕事をして行きさへすれば是に依つて惱まされることはないだらう。それは亞米利加及び英國の經濟學に於いて餘りに久しい間缺けて居た眞の生活の觀察に對して覺醒——若しくは再び覺醒すること——を注意する。』(“Surveys”: P. 210)

(註一) Oliver Wendell Holmes (1809-97) は亞米利加の

著述家、頗る多藝多能、詩、小説をよくするに共に開業  
醫となり、解剖學にも通じて居た。其の文藝的作品は  
獨創に富み、地方色のあるものと稱せられて居る。

(註一) Adolph Heinrich Wagner: "Lehrbuch der politi-  
schen Oekonomie." (1876) 現今是を改題して Lehr- und  
Handbuch der Pol. Oek. in einzelnen selbständigen  
Abteilungen といふ。

(註二) Wagner: "Finanzwissenschaft. 4 Teile. (1877-1901)  
(註三) M. Jourdain は Moirer 小説 "Tartuff." 若しくは  
は一名 "Le bourgeois gentilhomme" の主人公、完全な  
紳士と思はれんと力を盡して居る善良な市民。最  
後に彼は彼自身許りでなく全家族を教育しやうと努力し  
た。彼が一生涯散文許り語つて居たことを知つて驚いた  
ことが一種の諺となつたのである。

(註四) Sidgwick: "Principles" Introduction, chap. ii.  
Sec. I. [原註]

(註五) Keynes: "Scope and Method of Political Econo-  
my," p. 166. [原註]

(註六) Keynes: "Scope and Method of Political Econo-  
my," p. 166. [原註]

(註七) 例へば Marshall 教授の序文のある Price of "Indus-  
trial Peace." 及び Toynbee Trust の他の刊行物 [原註]

(註八) Keynes: p. 167. [原註]

(註九) 經濟學上に於ける方法論が其の正統學派其の他の  
演繹學派たると所謂歴史學派即ち歸納學派たるとを問は

團の歴史的思想に觸れて其の理想に鼓吹され  
た、人々であつた。是は彼等の不信任ではなかつ  
た。それは境遇の結果であつた。然し今日の此  
の學派の指導者は細節の研究に身を投じて、獨  
立の歴史の構成に向つて手さぐりしつゝ進んで  
居る。吾人は唯此の方向に於ける流が如何に強  
いかを發見するために、伯林のシユモラー教授  
並びに彼が其の周圍に集めた一團の協力者の公  
刊物及びストラスブルグのクナップ教授并に彼  
の仲間が彼等自身の前に提出した農業史研究の  
大計畫とを注意すべきである。而して歴史的研究  
に於ける此の眞面目な仕事と共に、其の研究  
がなさねばならない一般化の本質に就いて更に  
より明快なる理解が生じた。是等は單に現在の  
經濟學說の修正若しくは擴充である許りでない  
ことが見られる。是等は寧ろ經濟的發展に於け  
る階段の本質及び順序に關する結論であるのだら

す其の求むるところは同じく單なる自然科學的法則であ  
るに過ぎない。此の點に於いて兩者は全く同一である。斯  
の如き研究方法が果して社會の複雑なる現象を説明する  
に適當であるか如何かに就いては後に詳論する積りであ  
るが、歴史學派の所謂「法則」が如何なるものであるかは  
次節に於けるアシュレー教授の所説を以つて窺ふことが  
出来る。即ち其の本質に於いて同じく普遍的な自然科學  
的因果律に基いて何ものかを構成せんとして努力するも  
のであることを知り得るだらう。

三

「然し乍らすでに注意した如く、斯くの如く經  
濟學說の研究の本質に影響すると同時に、歴史  
的運動は自己の途に進み、而して今やそれ自身  
の道程の内に落着いた。是即ち經濟史それ自身  
の實際的調査に外ならない。こは恐らく幾分  
か驚くべき言葉であらう。『それでは是迄其の學  
派の經濟學者は何をなして居つたのか』と問は  
れるだらう。然し乍ら余は思ふに其の學派の創  
設者は本來の研究者と云ふよりも寧ろ彼等の周

う。こゝに於いて最早見地は與へられた社會狀  
態に於ける個々の間の約定に立つのではない。  
全産業及び階級の生活と行動の立場、社會的機  
制體の創造及變化の立場、經濟的現象と經濟的  
思想との平行的進歩と相互作用の立場である。  
此の學派の研究は最早個人主義者でなく心理的  
でない。集合論者にして制度的である。二つの用  
ひ古した然し便利な句は余の趣旨を更に補ふ。  
即ち彼等は「靜的」と云ふより寧ろ「動的」である  
と考へて「法則」及び彼等が經濟史の「哲學」  
の提起を目的として居ることである。而して  
斯くしてある時期に於ける彼等の興味は彼等が  
直接現在若しくはある他の時期と比較するこ  
とにあるのではなく、各時期が經濟的發展の曲  
線を決定する論點を彼等に供給するが故であ  
る。

「此の新歴史學派の首領グスタフ、シユモラーが

其の眼前に斯くの如き理想をもち、時には演繹的議論の古い仕事を續けてゆく試みに就いて僅でも漏らさねばならなかつたとは避け難いことであつた。彼の心の内にある理論家が彼等自身の方法の優れた功績に於けると等しい自信ある言葉を以つて反論せざるを得なかつたとも避け得なかつた。ある者にとつて主として其の精神的才能がある方向に存するからと云ふ理由で彼は其の特殊の思想系統を追求すると認めるのは屢々困難なことがある。彼自身近づけられた事業がすべての事業の内でも最も緊急に又有難いと感ずるのは極めて自然である。然しシュモラー教授は彼のものとしてある教課に柔順にしては居ないで、『古い獨斷論のすでに數百回も蒸溜した抽象を更に蒸溜する』<sup>(1)</sup>ことから進歩を豫期するのは無用であることを注意し、更に彼は廣い哲學的訓練を欠いて居る者は、彼の用ひた言葉

に従へば、マシュー・アーノルド<sup>(2)</sup>が稍々似た場合に云つた如く、確に『餘りに陽氣』であり、又確に悲痛を創造することを極めて明快に論述した。而してメンガー教授が其の敵手の勞作に對して面白い言葉——『縮少書』、『微物論』及び『あるギルド其の他に關する特殊論 (specialisma)』<sup>(3)</sup>等を發明して反論して居るが、彼は確な苦澁に殆ど酬ゆることは出来なかつた。

それから何が生ずるかを見やう。若し吾人に時があるならば相互の著書を讀もう。恐く吾人は變へられるだらう。恐く吾人は其處此處に一つの暗示を得るのみだらう。然し若しも吾人が同意することが出来ないならば、黙つて居やう。兎に角吾人は吾人自身の研究の爲に幾分の附加的時間を得やう。而して其間に人間思想の一般的進歩が靜かに解決を齎らすだらう。然し乍ら最近數年の論争が言葉の浪費であつたことを意味すると想像してはならない。多くの争論が歴史的經濟學者が活動の機會に對する權利が英國及亞米利加に於いて認められない内は必要であつたのである。獨逸に於て數年前反動的害惡——經濟理論家を學士院的影響の場所から餘りに完全に排斥した。——が存して居たことを聞いても驚かないに違ひない。然し今や休戦が名譽ある言葉で調印し得ることはさうなされるべきこと

「確に鬪論の休止を叫ぶべき時である。來たるべき暫くの間經濟學說に興味を有する正直な困苦する知識ある人々が存在しさうであることを認めさせやう。と同じ様に經濟史に興味を有する正直な困苦する又全然聰明でなくはない——事實亞米利加及び英國に於いては少數であるが然し尙ほ注意すべき——人々が存在しさうであることを認めさせやう。吾人はこゝ二十年の間互に嚴に單獨に打棄て、置いて見て、而してとであつた。ハーバード大學は變つた地位を實現すべき多くの大學の内でも最初のものである信用を受けなければならぬ。學問の多くの制度に於て現された兩方の態度——理論的と歴史的——を有する知識を見るべき第一のものであつた。其の行動は更に賞讃すべきものである。何故ならば自己の智的同情が主とし學說の側にある教師が、すでに一定の領分を有して居るのに、それ等の人々の鼓舞に於いて決定されたものであるからである。彼等は自由研究に於いて信任を示した。又尙ほ稀に存するところの大學の眞の本質の了解を示した。」<sup>(4)</sup> (“Survays,” P. 6-9)

要なる著作を知らない讀者は Keesby 氏の批評中の是に關する記事、一八九二年十二月の “Political Science Quarterly” に於ける現著者 (Ashley) の他の記事、及び “Survays” P. 132 の Knapp 教授近著に關する論文等を見られ、<sup>(5)</sup>「原註」(Ashley) の Survays 論文は “Professor Knapp's Lectures” をめぐり Knapp 教授の論文集

“Grunderschaft und Rittergut” (1897) の批評を云。

(註二) Palgrave's Dictionary of Political Economy, vol. II. (1896) 卷 (Ashley) の論文 “Historical School of Economists.” を比較せよ。【原註】

此の點のみに就いて見れば歴史學派の法則は演繹學派のそれと異なる。然し其の「動的」な變化の法則に就いて更に「層考究」を重ねる必要があつた。

(註三) Gustav von Schmoller: “Zur Literaturgeschichte der Staat- und Sozialwissenschaften.” p. 279. 【原註】

(註四) ibid. p. 293 【原註】

(註五) Matthew Arnold (1822-88) は英國の有名な詩人、批評家にして又教育家である。

(註六) Karl Menger: “Die Entstehung des Historismus in der deutschen Nationalökonomie.” pp. 26, 37. 【原註】

(註七) ibid. pp. 27, 37. 【原註】

(註八) ibid. p. 40. 【原註】

(註九) 最後の節は Ashley が Harvard 大學の就職講演としてのみ意味がある丈である。然し學問の獨立、大學の自由は以つて吾人の學ぶべき點であらう。(未完)

### 社會思想家としての

#### ウキリアム・モリス (一)

加田 哲二

私は本誌五、六兩月に涉つて「八十年代の英國社會主義」と題して、千八百八十年代において英國社會主義復活の豫備條件となつたものに就いて聊か述べるところがあつた。そうして更に同時代の社會主義運動並に學說が如何なる發達をなしたかを明かにする積りであつたが、雜誌編輯の都合上、一先づ社會主義復活の豫備條件だけを論ずるに止まつた。以下に論及しようとする「社會思想家としてのウキリアム・モリス」はその綴編の一部と見るべきものである。ウキリアム・モリスは四十幾才のときまでは單なる藝術家として暮してゐたのであるが、このまきに至つて始めて社會思想家、社會運動家として活動するに至つたのである。そうして藝術の門外漢である私にとつては彼の藝術を詳細に論ずることが出来ないから、それは彼の社會思想と關係のある範圍にのみ記することとする。

て教へられるところが多いのである。かゝる意味から云つてモリスの生涯について筆を起すことは無益のことであるまいと思ふ。

モリスの一家はウエルズ人の子孫であつた。彼の故郷は Severn 河の流域の風光明媚な所で、その地方の云ひ習はしで云ふやうに「世界中一番静かな所」 “The quietest places under the sun.” であつた。モリスの祖父は十八世紀の後半に商賣のために Worcester に移つて、その市民となつたのである。彼はすべてのことを非常に秀でた人で、また、甚だ信仰が深かつた。

こゝで彼は、當時退職海軍々醫で Nottingham に開業してゐた Charles Stanley 博士の娘 Elizabeth を娶つた。この夫婦の間に第二子 William Morris の生れたのが、千七百九十七年七月十四日のことであつた。この William Morris が後年藝術家として社會思想家として有名になつ

邦文を以て記されたモリス論には以下の數種がある。小泉信三氏「一種のユットピア」社會問題研究所載、室伏高信氏「ウキリアム・モリスの藝術的社會主義」ギルド社會主義第一卷所載、厨川白村氏「藝術より社會改造へ」詩人モリスの研究「象牙の塔を出て」所載、河田嗣郎氏「ウキリアム・モリスの藝術觀、勞働觀、文明觀」經濟論叢所載、堺利彦氏「藝術的社會主義者ウキリアム・モリス」雜誌改造所載、白鳥省吾氏「社會改造家としてのウキリアム・モリス」早稻田文學本年一月號所載等である。英文の參考書は引用のとき明かになるであらう。

思想家藝術家の生涯は概ね外面的に變化の乏しい生涯である。モリスの生涯も、その内面的には幾多の變化のあつたにも拘らず、外面的に表はれたところは、甚だ劇的場面に乏しい。彼の生涯を通觀して普通の傳記讀者をして快哉を叫ばしめるところは甚だ少ないのである。けれども人間の價値は單なる世間的成功を以て計らるべきではない。傳記讀者は數奇なる運命に對する興味よりも、人間の内的生活の記述によつ